

「コロノスコーピー」

Mount Sinai 医科大学教授 新 谷 弘 実 著

愛知県がんセンター消化器内科部長

小 林 世 美

新谷博士の「colonoscopy」の英文版の初版が出て早7年、医学書院発刊の単行本では未曾有の売れ行きとか聞いていたが、今度日本語版が出、更に読者層が拡がりそうだ。英文版の英語は、平易で大層読みやすく、日本語の訳書など不要と思っていたが、博士が日本国内向けに自分の言葉で語りかけたかった心情は十分理解できるし、実際読んでみて、実力を競うアメリカ社会の中で磨かれ、完熟をみた博士の堅固な思想と長年積み上げた学問が、訳者の助けを借りたとはいえ、一層の親しみをもって私共に近づいてくる。

私が彼のテクニックに初めてお目にかかったのは、1979年にニューヨークを訪れた時のことである。それまで他人の内視鏡テクニックをほとんど見たことのない私にとって、それは得も言われぬ素晴らしい

体験であった。スコープを操る彼の両手の動きは、名曲を奏でる名バイオリニストの動きに似ていた、天賦の才だけでなく、それにも増して彼の人並みならぬ努力が偲ばれた。アメリカで外国人が生き抜くためには、彼らを凌駕し、圧倒する強い精神力と逞しさ、それにたゆまぬ努力が必要である。新谷博士は、まさにその類の人である。

この本は colonoscopist としての新しい技術の開発、そして豊富な経験に基づいた診断学、治療学の完成編である。特にポリペクトミーの開発者として、安全な技術開発や合併症に対する処置など実地の学問を展開している。9章の30頁にわたる挿入法の記載のほとんどは、彼のオリジナルである。なかでも“pull-back and rotation technique”と“right-turn shortening technique”

を熟読されたい。私もこれらのテクニックを見学し、後にこれを応用するようになってから、スコープの深部挿入が随分容易になり、検査が実に楽しくなった。疾患の項では、欧米に多い大腸憩室や炎症性大腸疾患などに関して詳述されている。腫瘍性隆起性病変の章は、この本のもう1つの目玉で、ポリペクトミーで得られたポリープを材料に、彼の大腸腫瘍学が46頁にわたり展開されている。アメリカの厳しい臨床トレーニングを経験してきた外科医であるだけに、ポリペクトミー後の癌の取り扱い、あるいは合併症に対する処置、術後の follow-up などについての考え方の基礎にある合理的な姿勢には、1内視鏡学者を超越するものが感じられる。

とにかく、世界の第一人者としての自信にあふれた記述が随所にみられ、心強い。単なる技術論だけでなく、洗練された外科医の深い内視鏡哲学をこの名著から読み取れば、この道でのより一層の進歩を授けてくれることは間違いない。英語版を読みづらい人には有り難い書である。

B5判変型 246頁 図27 写真53
原色図210 色図5 1989
定価 18,540(税込) 〒300

医学書院 刊